

篠塚先生の人となりと学問

渡 部 茂

篠塚先生と私の最初の出会いは、私が学部生の時に共通の師であった東京工業大学名誉教授の故矢島鈞次博士の自宅の応接間であった。爾来40年近くに渡って公私共にお世話になった。先生は私を同僚として遇してくれたが、私にとって先生はむしろ良き先輩であり、良き師でさえあった。その先生の訃報にあった時、常に私を励まし続けてくれた先生のあまりにも早い死に人の世の無常を慨嘆せずにはいられなかった。先生が倒れられ、意識のない状態でお会いした時に、私の呼びかけにかすかに頷いてくれたことが意味するメッセージをしっかりと心に止めておきたい。

「人となり」

先生は謹厳実直な人柄であり、生活面はもとより学問的にも大変まじめで厳しい方であった。ともすれば、無骨で頑固一徹な印象が時として先生を孤高の人にさせたのかもしれない。そのまじめで一徹な性格は嗜好面にもはっきりと現れており、池波正太郎を愛し、酒はビールしか飲まず、どんなに体に害があるといってもタバコを手放すことはしなかった。私が先生にとって唯一師といえるゴルフもアドバイスは求めるけれども自己流で押し通した。

学問的にも大変厳しい人で、酒を飲んでいても談論風発、妥協を許さず、自説を曲げることはほとんどなかった。無論、だからといって教条主義者ではなく、常に真摯に学問に取り組み、探究心旺盛で、熱心に新説に耳を傾け、正しいと思えば、それを積極的に取り込み、自説を進化させていった。その守備範囲は広く、あらゆる問題にその深い造詣を傾け、多くの問題の解決に重要な手がかりを与えてくれたのも先生であった。そのせいか、厄介な問題にぶつかったとき、時間を見つけては先生と酒（ビール）を酌み交わすことが私にとって大きな楽しみとなっていた。否、むしろ酒を酌み交わしたいがために問題を提起したというのが真相かもしれない。

無論、まじめで厳しいからといって、人に対してもそうだということではなく、反対に大変やさしい人だったとすることができる。正確にいうと、弱者に対してやさしいというほうが適切だろう。常に権力に対して批判的であった先生は、ライフワークとして正義の問題と権力の抑制の問題に取り組み、弱者に目を向け、その救済のための処方箋を考究していた。その姿勢は研究の面だけでなく、教育の面にもはっきりと映し出されていた。

先生はもともと東京学芸大学で経済教育学を研究されてきた教育者であり、1970年に千葉商科大学に赴任されて以来、いかにして経済学をやさしく教えるかに腐心されてきた。先生が千葉商科大学にこられた1970年に大学院に進んだ私は当時有楽町にあった「経済教育研究協会」で、篠塚先生を含む数人の方々と政治経済学の研究会を定期的に行って大きな刺激を受けていた。特に研究会後に時々開かれた酒宴の席で、篠塚先生から経済教育の

重要性といかにして経済学をやさしく教えるかについて情熱溢れるお話をいただいたことは今でも忘れられない思い出となっている。その情熱は先生の最初の単著『経済学への誘い』にはっきりと反映されている。一般的な経済理論入門書の多くが抽象的な経済学の定義に続いて細かな重箱の隅をつつくような理論武装をした限界分析に基づくミクロ経済学から入るのが慣例となっている。その結果、多くの著者の意図に反して経済学が無味乾燥にして難解な学問という印象をもたれ、その面白さに到達するはるか以前に放擲されているのが実情である。だが、『経済学への誘い』では、簡単な需要・供給モデルの説明に続いてマクロ経済学を最初に配し、しかも難解な数学などを使わずに、視覚に訴えながら、豊富な実例を挙げて経済学を解き明かし、その妙味を教えている。まさに先生の面目躍如たる構成となっている書物であり、経済学の入門書として優れた成果をあげてきた。

先生が実際の講義でも学生にわかりやすく説明することに腐心している様子は日頃のお話からも良く伺えた。先生の書体は独特のものであり、時として難解であったし、先生の話し方も早口で、理解が困難なときも少なくなかった。そのことを誰よりも知っていた先生はさまざまな工夫をしていたが、どうやらそれだけはかなわなかったようである。最後はあきらめたというようなことをご本人から聞いたことがある。

「学問」

先生から間違いを指摘されることを覚悟しながら、学会、研究会、書籍の執筆、等々、あえてこれまでのお付き合いを通じて私なりに解釈させていただいた先生の学問的系譜について概説してみたい。先生の一貫した姿勢は権力や既得権に対する批判的精神にあり、当初は社会主義に傾倒した時期もあったようだが、本質的には自由主義者のそれであった。それも、古典的自由主義者や保守的・日和見的自由主義者ではなく、誤解や偏見を恐れることなくいえば、ロールズ流の正義論を取り込んだハイエク的な新自由主義者であったといえるかもしれない。

学問的系譜という点からすれば、研究者としての第一歩は金融理論に対する関心であり、その研究はその後かなりの期間にわたり続いた。当初はケインジアン的な思考をベースにしていたが、最終的にはマネタリストに深い関心を寄せていたようである。後者への傾倒が新自由主義者、とりわけフリードマンへの関心の高まりと時期を同じくしていたことは疑いないところである。

その後、組織研究に関心が移り、特に前述した「経済教育研究協会」での研究会では、とりわけパーソンズの AGIL 理論を中心とする分析パラダイムに基づいて組織と環境の問題を考察するようになった。とはいえ、そのあまりにも抽象的な理論に限界を感じて、パーソンズから離れていったが、組織の問題に対する関心はその後決して失せることはなかった。

先生の生涯で学問的研究の中心はどこにあるかと問われるならば、経済理論そのものよりも社会・経済哲学にあったというほうが正しいだろう。経済理論から哲学へと研究の中心が移っていった決定的な出来事はロールズの『正義論』との出会いであった。もともと若いころから社会問題に対する関心が強かった先生は、私も共訳者に名を連ねることになった『正義論』に出会うや、たちまちその魅力に取り付かれ、ロールズ流正義論をベースに社会秩序のあり方を模索することとなった。この問題が先生のライフワークの一つとなっ

たことはいうまでもない。

このロールズ研究が先生の哲学的関心を呼び起こした最大のきっかけであるとするならば、先生の社会・経済哲学への関心を決定的に深化させたのはハイエクであるといっても過言ではない。ハイエクが単なる経済学者でないことは周知のことである。それどころか、20世紀最大の社会哲学者の一人であり、最も偉大な新自由主義者の一人である。新自由主義の研究を始めていた先生がハイエクの数々の文献を読みあさり、その後、私も訳者として名を連ねたが、春秋社から出版されることになった「ハイエク全集」の翻訳を通じて、その哲学的洞察の深遠さに触れ、ハイエク研究にのめりこんでいったことは時間の問題であり、ある意味ではこれまでの研究の系譜からして当然のことといえよう。とりわけ、ハイエクの自生的秩序論と社会的正義論はロールズの正義論と同様、生涯、先生の脳裏から離れることはなかった。

以上、篠塚先生の学問的系譜をごく象徴的に概説してきたが、先生の探究心は倦むことを知らず、絶えずあらゆる方向にアンテナを張っており、その知的関心の広さと造詣の深さには常に驚かされると共に、大きな刺激を受けてきたものである。今となっては、先生に驚かされることはないが、直接的な知的刺激を受ける機会がなくなったことに淋しさを覚える。いつの日か「黄泉の国」で一杯やりながらロールズからハイエクに至るまで、あらゆる問題について教えを受けたいものである。